

八甲田山雪中行軍事件

日露戦争までの日本軍は正しかったのか

荒井悦郎

はじめに 今、なぜ「八甲田山雪中行軍」なのか

八甲田雪中行軍遭難事件（はっこうだせっちゅうこうぐんそうなんじけん）は、1902年（明治35年）1月に 日本陸軍第8師団の歩兵第5連隊が青森市街から八甲田山の田代新湯に向かう雪中 行軍の途中で遭難した事件。訓練への参加者210名中199名が死亡（うち6名は救出後死亡）するという日本の冬季軍事訓練における最も多くの死傷者が発生した事故であるとともに、近代の登山史における世界最大級の山岳遭難事故である。 Wikipedia

正式名称 歩兵第五聯隊雪中行軍遭難事件

(1) これまでの研究史

歴史としての研究立ち遅れ
ベストセラー小説と映画のヒット→事実との乖離に不満
歴史学以外の研究が先行

(2) 日本史上での位置づけ

1. 歩兵第5連隊の雪中行軍

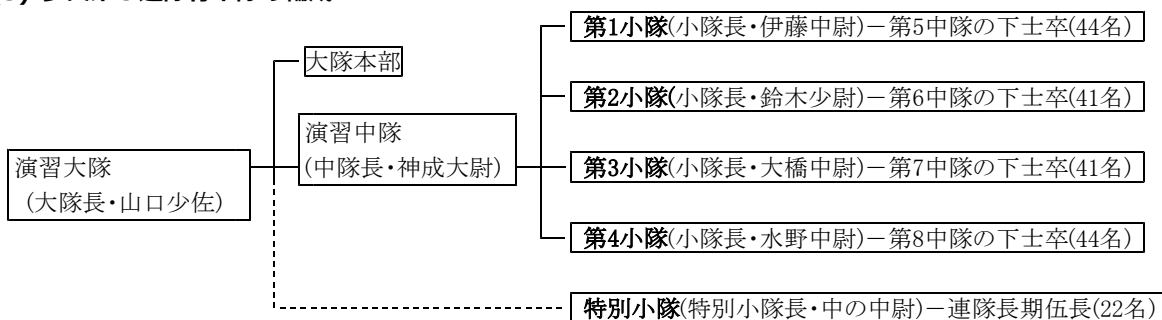
(1) 第8師団とは

日清戦争後の軍備拡張→6個師団から12個師団へ

(2) 雪中行軍実施計画

- ①想定 「仮想敵であるロシアが八戸平野に進攻し、交戦のために混成旅団が陸羽街道沿いに東進している。旅団の右側衛（行軍隊）は宿営している青森屯営から田代街道を三本木に進出し、旅団の作戦を容易にすること」
- ②目的 「降雪期に青森より田代を経て三本木に進出する時の通過の難易、並びに行李運搬（物資輸送）法の研究」
- ③計画 兵営から田代までの一泊行軍をおこない、最も困難と考えられた田代までの行軍(第1段階) 戦時編成歩兵一大隊と大小行李特別編成をもって兵営から三本木に至る行軍を実施(第2段階)
- ④実施者 中隊長の神成文吉歩兵大尉を指揮官 大隊長の山口鋌歩兵少佐が随行
- ⑤日程 1月23-24日(1泊2日)、筒井兵営→田代(村落野営)→翌日筒井帰営
予行行軍(1月18日) 行程の半分に当たる小峠まで往復。晴天に恵まれ、輸送用そりの使用も順調
所要時間(8km) 往路4時間 復路2時間

(3) 歩兵第5連隊行軍隊の編成



(4) 行軍の実施

1月23日(第1日)

午前 6 時半 筒井村の屯営出発。出発当初穏やかだった天候は次第に悪化。未曾有の低気圧により気温は急激に低下。帰営すべきという意見もあったが、そのまま前進。

馬立場南方の窪地で露営予定の田代に向けて設営隊を先行させるが、設営隊は道に迷い高地を一周して行軍隊の後尾に合流。

午後 8 時半ごろ 予定の露营地田代への到着は不可能となり、大隊長の山口少佐は神成大尉に現在地での露営を命じる。小隊 40 人が入れる雪濤を掘るが、一間以上掘っても土が出なかった。雪の上で炊事をしたが、ようやく炊けた飯は一食分にも足らず。携行餅は全く氷のようになっていたが、飢えのあまり食べる者が多かった。気温は-20℃度以下。

1月24日(第2日)

午前 2 時ごろ 山口少佐ら将校たちの協議で部隊の帰営を決定。大吹雪の中、馬立場を目指して出発。

午前 3 時半ごろ 鳴沢付近で道に迷い、最初の凍死者。隊員は疲労困憊し、統制がとれない状況。

夕方ごろ 鳴沢付近にて凹地を発見し露营地(第2露营地)とした。結果的に前露营地より西北に約3000メートル進んだだけと判断。雪濤は掘れず吹曝しの露天に露営。

前日よりほとんど不眠不休で絶食状態であるため、猛吹雪と気温低下で凍死者多数。

1月25日(第3日)

午前 3 時ごろ 馬立場方面を目指して出発。本隊が露营地(第2露营地)に戻ったところに大隊長山口少佐が人事不省に。

午前 7 時ごろ 大隊本部所属の倉石一步兵大尉は斥候隊2組8名に田茂木野方面の帰路を探させたが、隊員はばらばらになり、多数の凍死者。

山口少佐・倉石大尉の隊と神成大尉の隊が出会えず、中の森にて2か所に分かれて露営。露营地では、凍死した将兵の背囊を燃やすなどして寒さを凌ぐも、多数の兵士が凍死

1月26日(第4日)

明け方ごろ 出発。生存将兵は60-70名。

夕方までに 生き残った部隊(約30名)は田茂木野を目指す神成大尉一行数名と、駒込沢沿いに青森を目指した倉石大尉・山口少佐一行約20名に分かれた。

歩兵第五連隊救援隊が大峠まで捜索活動。

田茂木野出発が遅れ、気温は-14℃、風雪も厳しくなり捜索を断念、引き返す。

1月27日(第5日)

救援隊、捜索活動を再開。午前10時半ごろ、大滝平付近で雪中に仮死状態の後藤房之助歩兵伍長を発見、雪中行軍隊の遭難が判明。

3. 救援活動と陸軍の善後策

(1) 歩兵第五連隊の捜索計画

1月27日午後7時 連隊長、将校を招集し捜査・救護を指示

- ① 連隊は全力を挙げて捜索救護に任ずること
- ② 田茂木野に拠点置き、遭難地に捜索救護隊の集屯所を設けること
- ③ 屯営地と遭難地との間に数か所の遞伝哨を設け後方連絡を確実にすること
- ④ 電線の架設を師団に請求し通信を敏活にすること

実施時点では幸畑に資材集散基地、田茂木野に捜索本部を置き、そこから哨戒所(遞伝哨、キャンプ)を順次構築、前進させる方法が取られた。哨戒所は大滝平から最初の遭難地点の鳴沢まで11か所を設置

1月28日 捜索開始

5月28日 最後の死体を発見、死体捜索全部完了

6月20日 武具装具捜索終了 捜索を完結



(2) 児玉陸相の善後策

第1報(電報)

1月28日 8時49分 青森憲兵分隊長→憲兵司令官・山内長人

23日出発の雪中行軍隊が未帰営。27日下士官の生存者1人、2人の遺体を発見 その他詳細不明

同日 午前中 山内から陸軍大臣児玉源太郎陸軍大将に報告。

第2報

1月28日12時08分 津川連隊長→陸軍省総務長官 遭難。搜索・遺体発見経過、現在も搜索中。

1月30日 山口鋌少佐と第六中隊長興津景敏歩兵大尉が死亡したと判断
→正六位に位階陞叙(特旨叙位)の沙汰

1月31日 対策委員会(「歩兵第五連隊遭難二関スル取調委員会」)設置

委員長 陸軍省人事局長・中岡黙陸軍少将

① 犠牲者待遇に関する10項目

○凍死者はすべて戦死者同様に扱う

○遭難地に官費で埋葬し、官費で記念碑を建設する

○靖国神社に合祀すること など

② 行動計画の可否を審査して責任を明らかにすること(項目第11)

(3) 新聞報道と『万朝報』の責任論

2月4日付 『国民新聞』 「軍隊凍死事件」

2月5日付 『万朝報』 「凍死事件に対する疑問」

「空前の大惨事を生じたる上長官の措置に至つて八、吾人聊か疑ひなきこと能はず……本件に関して八決して其の責任を没する可らず」

①目的と内容 ②時期 ③準備

2月6日付 『万朝報』 「五聯隊の責任」…行軍に疎漏あり

①住民が忌む「山の神の日」(旧暦12月12日)を無視したこと

②農民の諫止を無視、指揮官も兵卒も青森の雪に経験がないこと

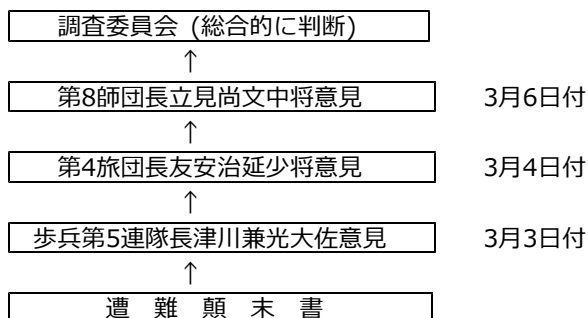
③晴天を待たず、連日頻りに彷徨して体力を消耗したこと

④第五連隊搜索の緩慢

⑤第八師団の悠長な対応

(4) 対策委の活動

2月1日 活動開始(情報収集=第五連隊からの報告)



(5) 対策委の結論(5月28日)

- ① 責任者の処罰…聯隊長の搜索活動の緩慢だけを問題とする
- ② 「未曾有ノ出来事ニシテ軽々処断スベカラス」→軍事参議官にも意見を聞く
 - 大山巖参謀総長→連隊長一人を罰すればいい
 - 野津道貫教育總監→連隊長処罰必要なし

4. 民衆の事件受容

(1) 凍死者の家庭とその生計

階級氏名	出身町村	家族構成と生計
看護手 A	西磐井郡 永井村	実父母弟妹 戸主耕地4町7反5畝13歩(地価611.55円) 国税20.081円、県税17.177円、村税13.019円 一家農業に従事し、 中等の生計 なり
一等卒 B	涌津村	父母弟妹 戸主耕地1町6反8畝12歩(地価117.68円) 国税10.489円、県税9.930円、村税12.020円 生活稍々可
二等卒 C	涌津村	実父 c が父子4人と共に村内松の防に別居 赤貧洗うがごとく C滞郷中は 大工 を業として僅少の賃金にて辛くも家族の糊口し居たり 同人入営以来 c は他人に傭はれて所得の錢を以て一縷の命脈を繋ぎ来りしなりと云ふ
二等卒 D	涌津村	実父母及弟等あり、養兄 d の家族たり 戸主耕地5反5畝3歩(地価81.094円) 国税2.026円、県税2.416円、村税2.535円 農業を営めども一家11人の内労働に耐えるもの纒に2人にして其他は全く老若以て如何に生計の困難なるかを知るに足る

『奥羽日日新聞』1902年2月19日・20日付

(2) 青森憲兵隊の出張報告(1902年2月6日付)

犠牲者の多い徴兵区の遺家族の状況

① 上流者

「遭難者八氣ノ毒ナルモ陸軍一般ニ取テハ無上ノ経験ヲ得タルナラン…今後当局者ニ於テ死者ノ遺族ニ満足ヲ与ヘサレバ徴兵忌避ノ慮アリ」(宮城県登米・本吉郡)

「雪中行軍ハ雪国ニテハ必要ニシテ当時某国ト戦争スルコトアルヤモ計難シ、之レガ演習ヲ為スハ妨ケナシ」(岩手県胆沢郡)

② 中流者

「聯隊長ガ早く救助隊ヲ沢山出サリシヲ非難シ居レリ」(登米・本吉)

「青森地方ノ積雪ノ模様及軍隊ノ情況ニ通セサル為メ二百余名ノ人名ヲ損スル程ノ大雪ニ行軍セシメタルハ厳酷ナリ」(胆沢)

③ 下流者

「(遺族の)大部分ノ感情ノ内心ハ我々愛子ヲ雪中行軍ノ為メ凍死ニ至ラシメタルハ其聯隊長又ハ大隊長ノ不注意ヨリ起リタルモノナラント」(胆沢)

「野悲ノ如何ヲ問ハス只管子弟ノ愛情ニ流レ如何ニ軍隊ノ命令ナレバトテ兵士ヲ酷ニ取扱フカ故ニ斯ル多数ノ人名ヲ損スルニ至リタルハ残念ナリ」(登米・本吉)

補論. 歩兵第31連隊の雪中行軍

- (1) 臨時中隊編成 指揮官：福島泰蔵歩兵大尉 総員37名(他に「東奥日報」同行記者1名)
- (2) 任務 「積雪時に十和田山脈を横断し直に軍隊を津軽平原より南部平原に移動させられるか」
「八甲田山脈を横断し直に軍隊を三本木原より青森港に進出させられるか」
「もし進出させられるなら、その難易を検討」
- (3) 行程 1月20日から29日まで(9泊10日) 宿泊-舎営

5. むすび 1902年という画期

付図

地図1 救援活動のために急遽つくられた五万分の一地図(路上測図)

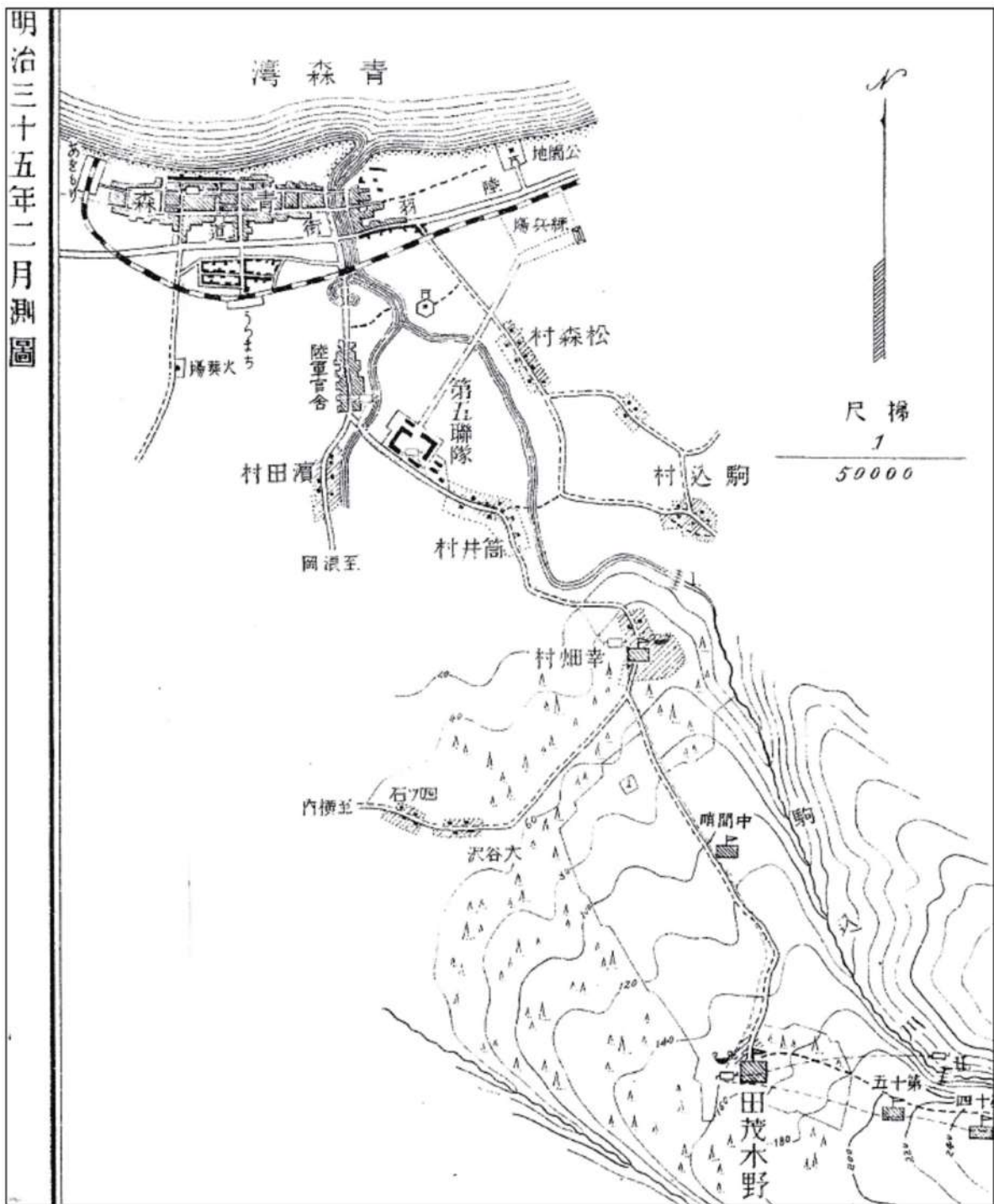


図1A
雪中行軍救援活動 作業用 全体図 5万分1迅速(路上)測図 図1A~1C(分割)
出典：『遭難始末』 歩兵第5聯隊 1902 折込「第一圖 搜索線之圖」 原寸

地図3に接続

井口悦男「明治35(1902)年 八甲田山雪中行軍救援時作成迅速測図2面」 帝京大学教育学部紀要1 2013年

地図2 五万分の一地形図（正式） 1912年測図

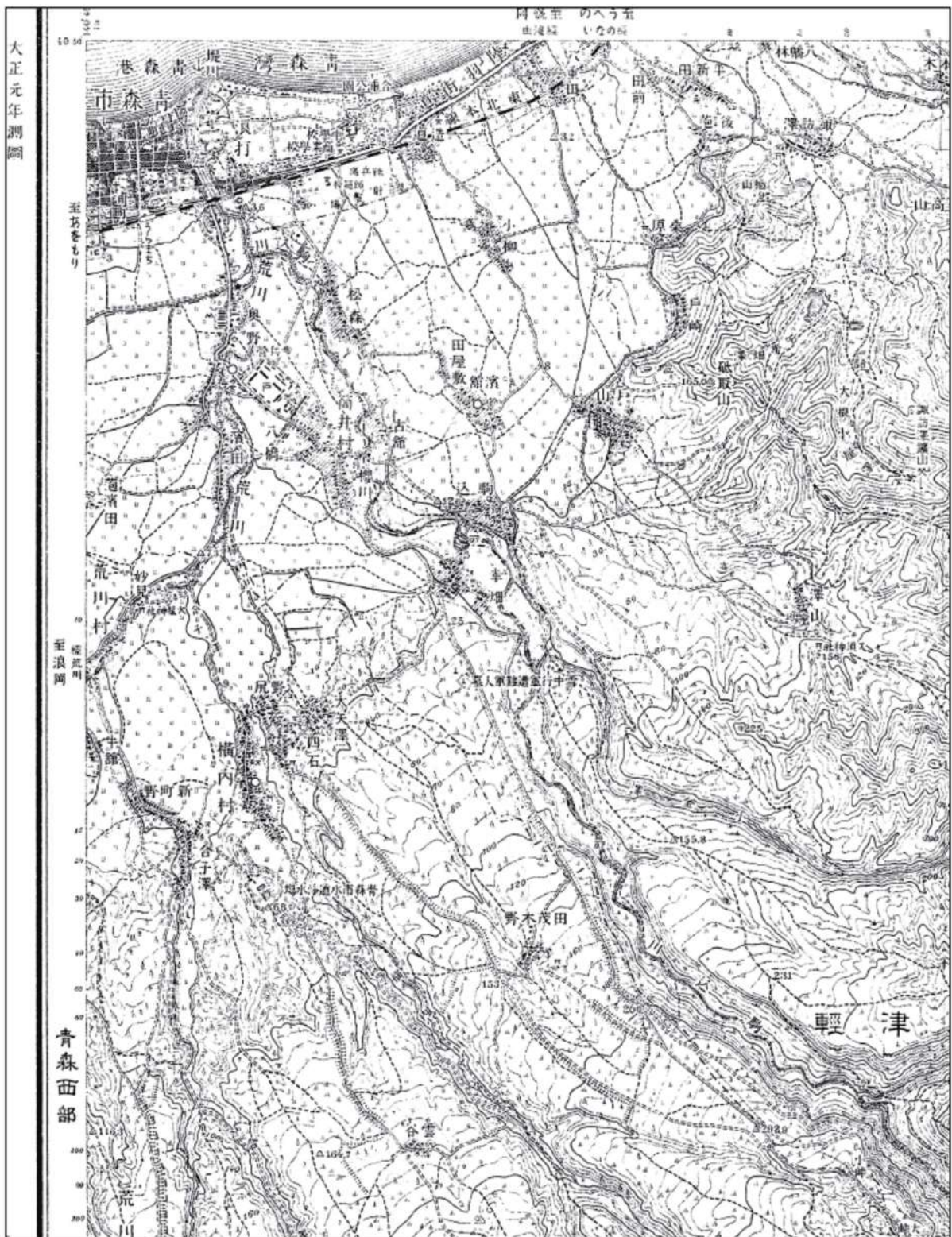


図2A

図1A～1Cと同位置比較のため正式図5万分1 図2A～2B(分割)

出典：「青森東部」 大正元年測 陸地測量部 原寸

地図3 救援活動のために急遽つくられた五万分の一地図(路上測図)

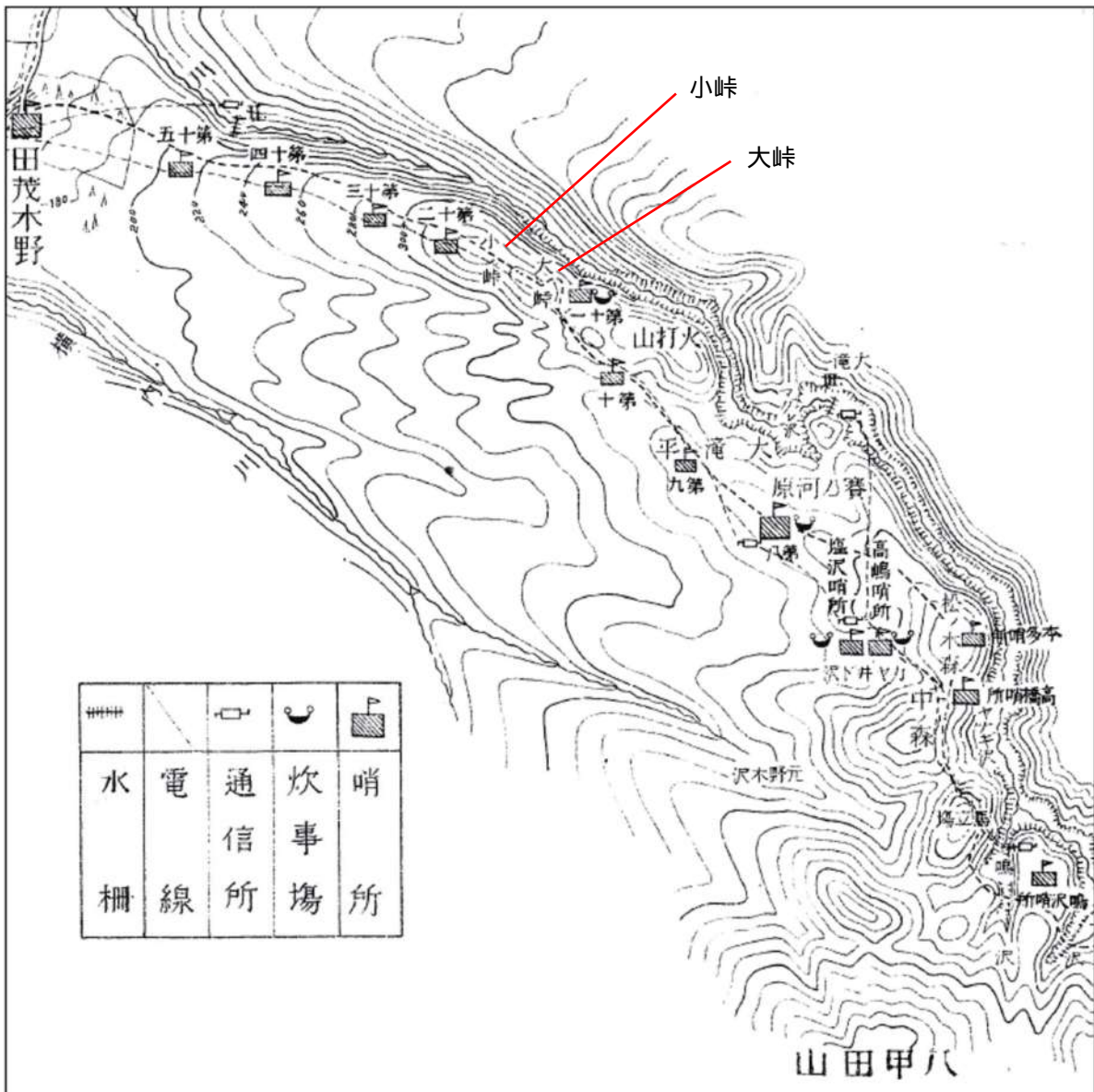


図1B 5万迅速

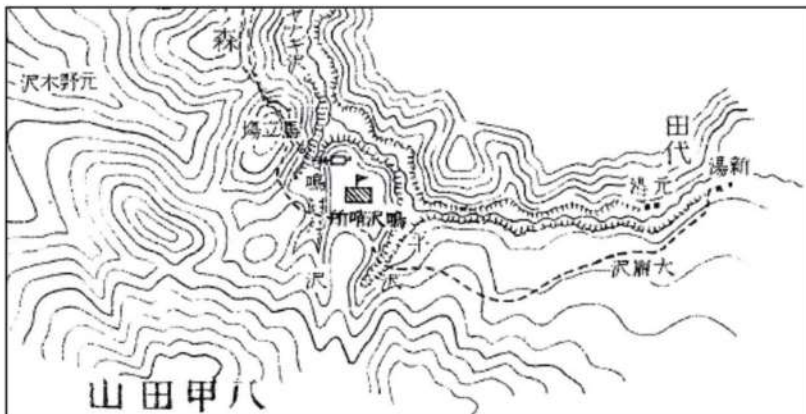


図1C 5万迅速

井口前掲論文に加筆

地図4 遭難地之図 (1万分1目算測図)

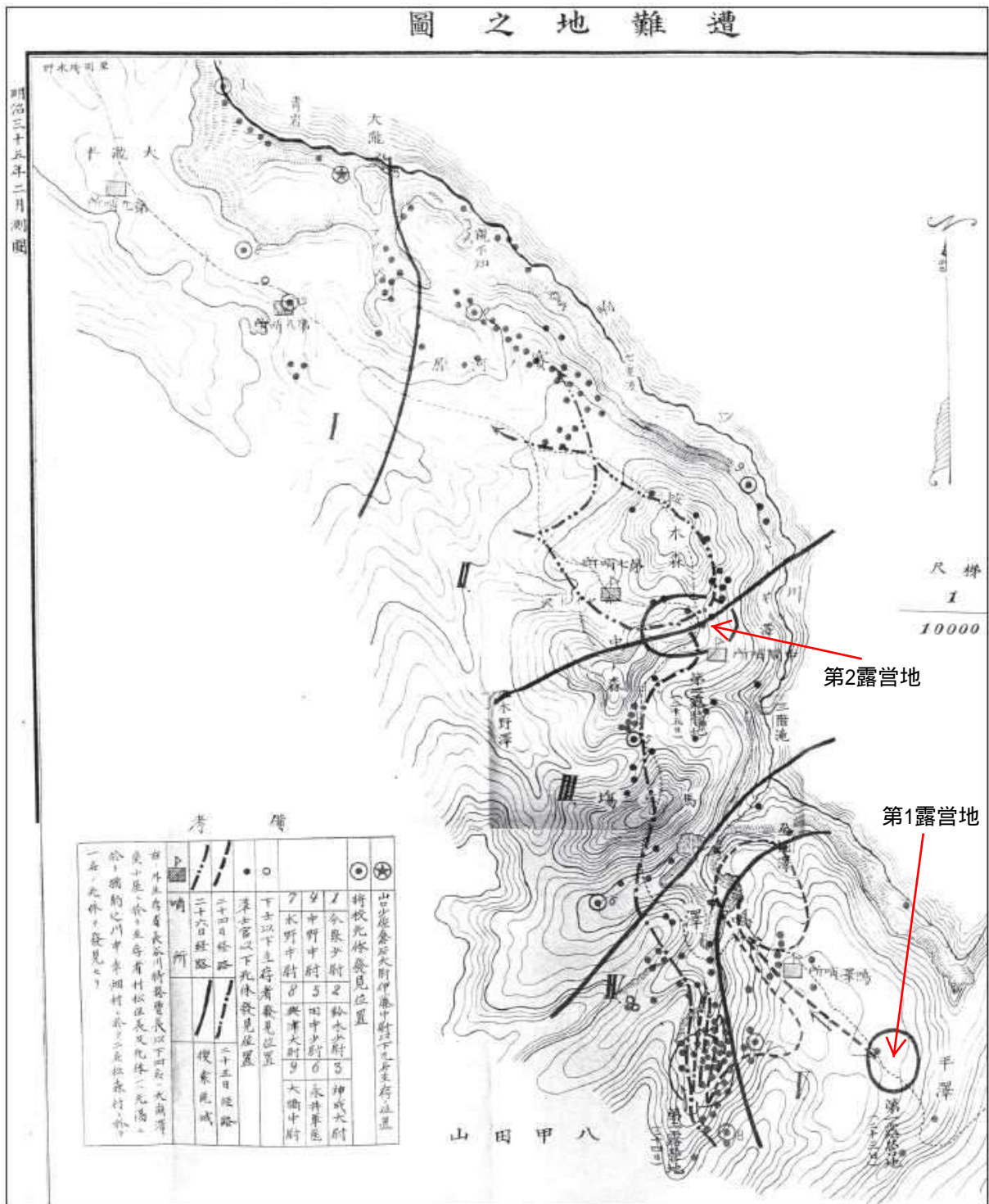


図3
雷中行軍救援活動 作業用 部分図 1万分1迅速(目算)測図 2万分1に縮小
出典:『遭難始末』折込「第二圖 遭難地之圖」

井口前掲論文掲載地図に加筆